

低湿地遺跡の水浸木質遺物の取り上げ

—借当川遺跡出土の木樋および浜野川神門遺跡

出土の鍋敷状製品について—

金丸 誠
麻生 正信
服部 哲則

昭和61年度において、研究部では現場からの依頼を受けて、2箇所の遺跡で水浸木質遺物の発泡ウレタンによる取り上げを行った。

1. 大型水浸木質遺物の取り上げ例

—借当川遺跡出土の木樋の取り上げ—

(1) 遺跡の位置と周辺の環境

本遺跡は、香取郡多古町南借当に所在し、昭和61年度借当川にかかる橋のかけかえ工事に先立ち発掘調査された。

借当川は八日市場市と多古町の境を流れており栗山川の支流のひとつである。

現在の借当川は、幅約600mの開析谷の中間を流れ、川幅は約12mを測る。以前はかなり蛇行していたと言われ、大雨のたびに氾濫を繰り返していたようである。

この借当川が流れる沖積平野は低湿地となり、堆積土は泥炭化し、多くの有機質遺物を包含している。その中でも特筆されるものに独木舟の出土がある。現在までに栗山川本流域で検出された独木舟は19隻が知見されており、その他に17隻以上を数えることができる。

例えば、中野独木舟出土地A・B・C、矢摺泥炭遺跡、宮田下泥炭遺跡、広川遺跡、七升遺跡、埋地遺跡、南部田遺跡、中城下泥炭遺跡、於幾大縄場遺跡、木戸台低地遺跡、新谷3番遺跡、新谷2番遺跡、飯土井遺跡、儘作遺跡、公崎下泥炭遺跡、大部田泥炭遺跡等があげられる。その多くは縄文時代後期(加曾利B式期)に属するものと考えられる。

又、台地上の関連する遺跡について見てみると久方貝塚(縄文中~後期)、木積貝塚(縄文中期)、安久山遺跡(先土器、縄文前~後期、古墳後期、奈良・平安)、大堀遺跡(縄文中~晩期)、龍ヶ台遺跡(縄文晩、弥生中期)、駒木台古墳群(古墳後期)岩坂遺跡(古墳~平安)、宿井戸貝塚(縄文前期)等があげられる。

(2) 木樋の検出状況

借当川右岸の発掘区を現地表面より1.6mほど掘り下げたところ、発掘区内を北西から南東に横切る溝が検出され、その中より出土した。溝の両側には杭が打ち込まれ、兩岸の崩壊をふせいでいる。そのうちの8本は、木樋の両側に1.5m間隔に打ち込まれ、杭の頭より50cmのところにはぞ穴を穿ち、横木を組み合わせ、その上に木樋を置いている。杭の長さは、1.2m程である。

木樋は、長さ約6.8m、幅40~70cm、深さ20cmを測る。樹種は、クリと思われる。本来は、独木舟として使用されたものであると考えられるが、船首にあたる部分が欠損しており、廃棄された独木舟を二次利用したものと考えられる。

出土した標高は、約2.8mで、現在の借当川の水面高は、2.6mである。

出土した土層は、第13層直上で有機質を多量に含む黒色粘質土で数回にわたる洪水をうけ、青灰色砂と褐色シルトが互層を成している。近世から奈良・平安時代までの遺物が包含されている。



第1図 遺跡位置図

- 1 借当川遺跡
- 2 矢摺泥炭遺跡
- 3 中野独木舟出土地 A
- 4 // B
- 5 // C
- 6 宮田下泥炭遺跡
- 7 大堀遺跡
- 8 宿井戸貝塚

1 : 25000

(3) 取り上げ工程

①



① 検出後、記録写真、作図、レベリング、エレベーション等を行う。

②~③



② 乾燥を防ぎ、発泡ウレタンの離型材とするため、薄い紙（トイレトペーパー）を重ね貼りする。

③ 遺物の下の土を高さ約50cmの柱で残し、廻りを掘り下げる。

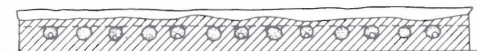
④~⑤



④ 1mおきに直径約20cmのトンネルを掘り、鉄パイプを通す。この時、トンネルの上端で遺物の底が出るようにし、これにも紙を貼る。

⑤ トンネルとパイプの隙間に発泡ウレタンを入れる。

⑥



⑥ その間にもさらにトンネルを掘り、発泡ウレタンを入れる。

⑦



⑦ トンネル同志の間も掘り広げ、やはり発泡ウレタンを入れる。これで、遺物の底は、ウレタンにより地面から切り離される。

⑧



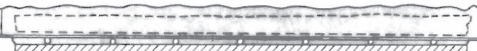
⑧ 遺物の両側および前後に、底部のウレタンと同じ高さで底板を、また底板と隙間ができないように、遺物側面から10~20cm離れた位置に側板を立てる。

⑨



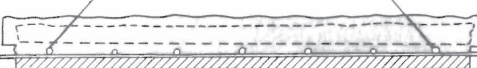
⑨ 遺物と側板の間に発泡ウレタンを流し込み、遺物の廻りを固める。

⑩



⑩ 遺物の上面に発泡ウレタンをかけ、完全にくるむ。

⑪~⑫



⑪ 板材等はずし、横方向の鉄パイプをジョイントによって、縦方向の鉄パイプで継ぐ。

⑫ クレーンで吊り上げ、地上に運び出す。

第2図



写真1

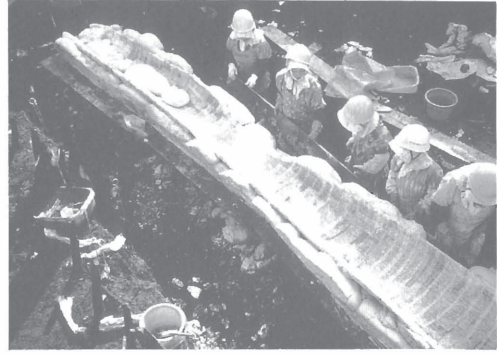


写真5

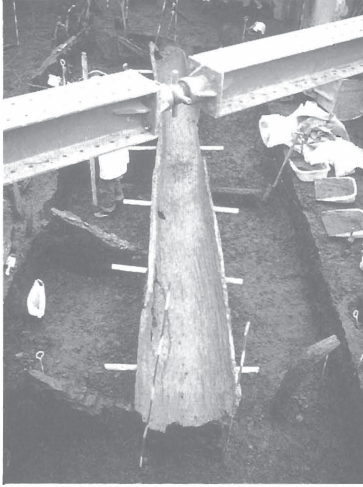


写真2

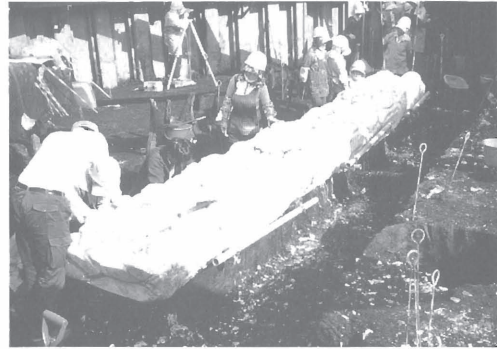


写真6

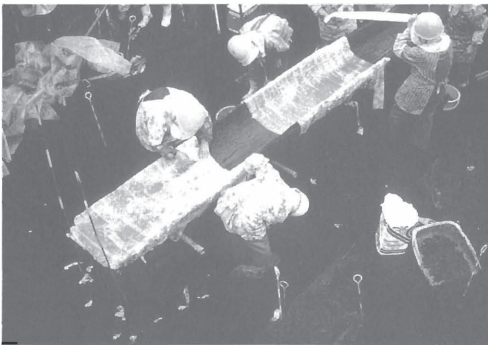


写真3

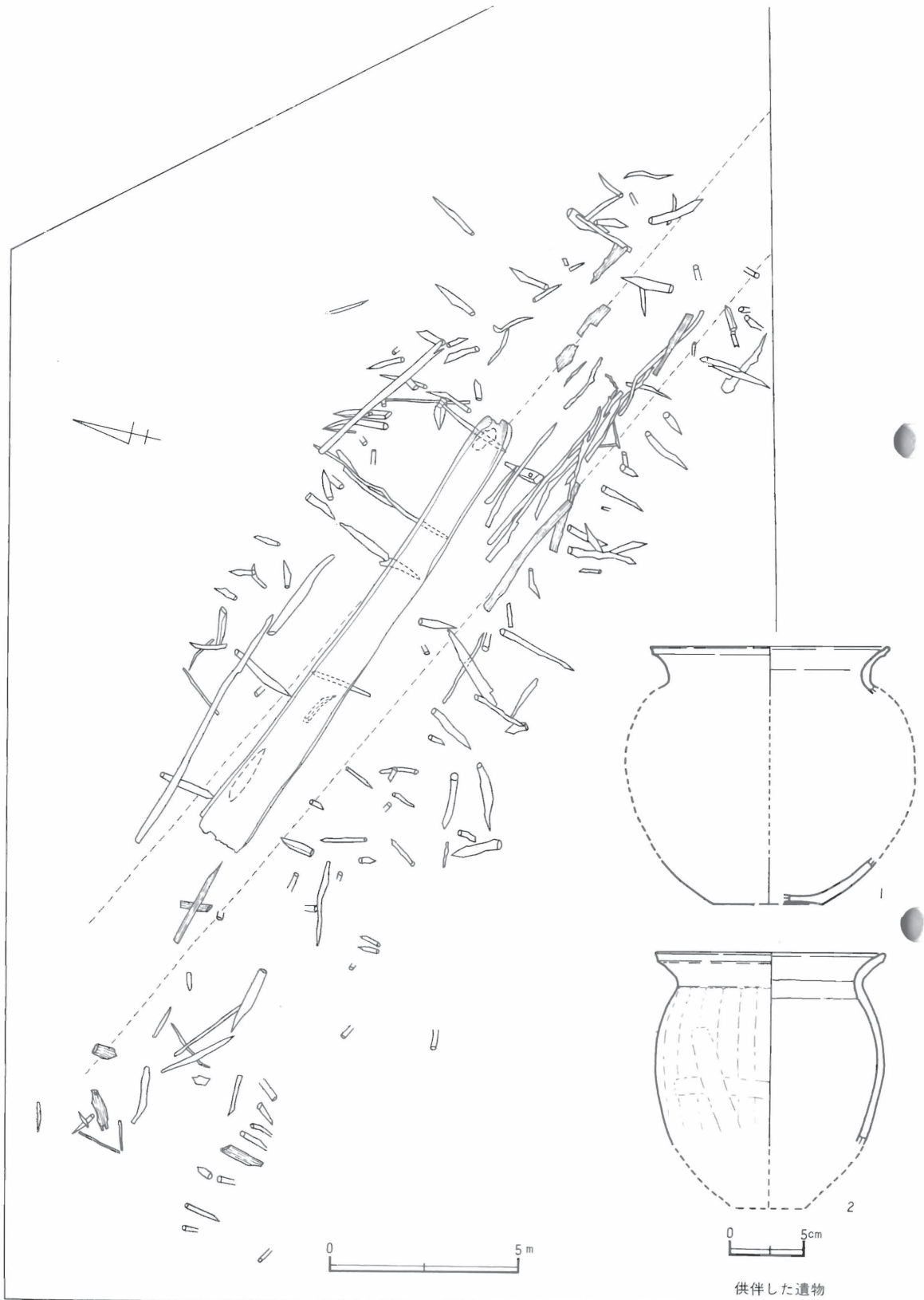


写真7



写真4

- 写真1 木樋検出後の実測風景。
- 写真2 トンネルを掘り横方向にパイプを入れる。
- 写真3 乾燥をふせぐため湿った紙をまく。
- 写真4 底にウレタンを入れ終わった状況。
- 写真5 側面にもウレタンを入れる。
- 写真6 上面にもウレタンを入れ終り、縦方向のパイプを取りつけた状況。
- 写真7 ユンボによって発掘区から地上につり上げている状況。



第3図 借当川遺跡遺物分布図

2. 小型水浸木質遺物の取り上げ例

一浜野川神門遺跡出土の鍋敷状製品の取り上げ一

(1) 遺跡の位置と概要

本遺跡は千葉県南生実町 720 番地他に所在し、昭和60年度に実施した浜野川遺跡群の確認調査によって確認した縄文時代前期の貝塚及び弥生時代から中・近世の包蔵地である。遺跡は、市原市に近い村田川によって運ばれた土砂などで形成された海岸平野上にあり、北からその海岸平野に突き出すように延びている台地の先端部に接している。この台地は中世の小弓城のあった場所で、確認調査ではこれに関係するものと思われる遺物も出土している。東京湾からは約 3 km 程東に入り、村田川からは約 1 km 程北に行ったところである。現状は水田であり、現地表面での標高は 6.5 m 前後を計る。本遺跡の土層を模式的に説明すると、現水田耕作土—中・近世の包含層（青緑色或いは黄色の砂ブロックが多量に含まれている。）—奈良・平安時代から弥生時代の包含層（植物遺体が未分解のまま多量に含まれる泥炭層）—縄文時代前期の包含層（黒色泥炭層）—縄文時代前期貝塚—青灰色砂層（この層は一部遺物包含層になる。）となっている。今回ここに報告する鍋敷状製品は、青灰色砂層から出土したものである。なお、貝塚の下底面の標高は約 3.5 m で、規模は厚さが 1 m 前後東西約 14.5 m・南北約 6.5 m の南側でとじる三角形で、北側は調査区外に延びている。貝塚及び下の青灰色砂層からは土器と共に獣骨や骨角器が多く出土した。また、貝塚の南西部を中心とした地区で集石遺構を 22 基検出した。構成する石はどれも比較的小さい物が多く、幾つかの集石では炭化物片を伴っている物が認められた。鍋敷状製品はそれらの集石などとほぼ同じレベルで出土したものである。

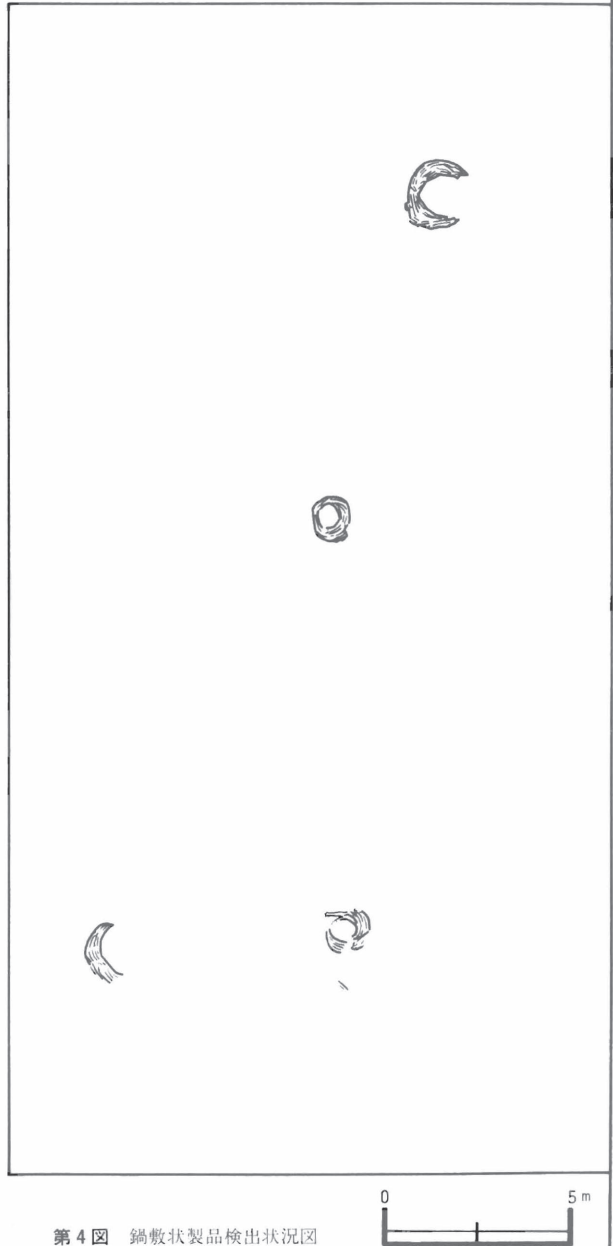
(2) 鍋敷状製品の検出状況

出土地点は調査区が一番東側で、標高は 3.5 m から 3.6 m である。出土層の青灰色砂層は、中に灰色の粘土質の土壌を含み、未分解の植物遺体を混入する土質である。出土状態はほぼ水平で、ドウナッツ状に丸くなっている物と一部が欠失している物が見られたが、特に近接する集石などに関連を思わせるような状態は見られなかった。使われている植物の種についてはまだ不明の段階であ

るが、おそらく葦の類いであろうと思われる。これらはいずれも編んであるといった物ではなく、葦の茎の部分を束ねてよって作られた物と思われる。大きさは、一周する物で径が約 20 cm で太さが 5 cm 前後で厚さは今の段階では不明である。

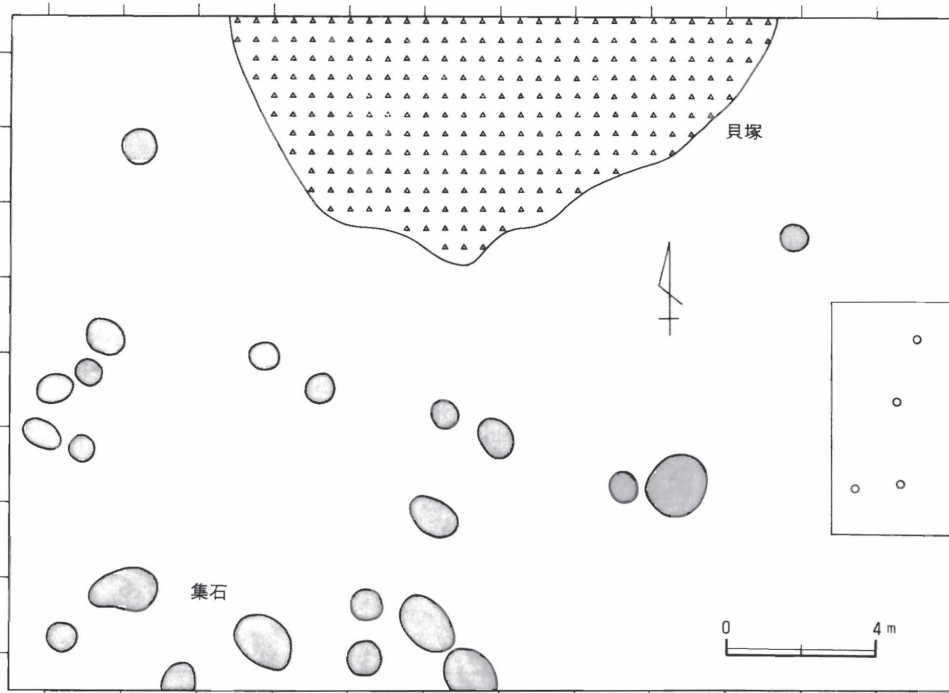
(3) 伴出した遺物

この遺物の時期については直接相伴する土器などはないが、近接した位置からほぼ同一レベルで諸磯 a 式の土器が出土しているのもこれと同時期と考えてよいかと思う。





第5図 浜野川神門遺跡位置図 (1 : 25,000)

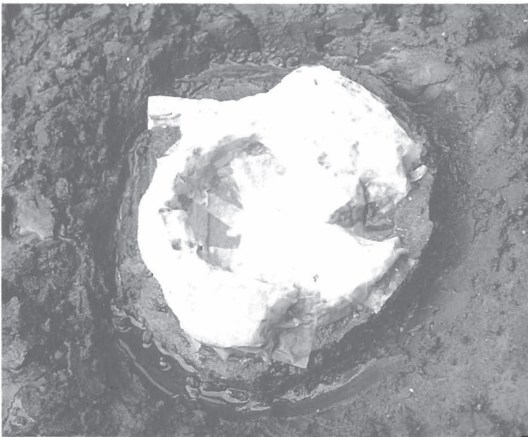


第6図 浜野川神門遺跡遺構配置図

(4) 取り上げ工程

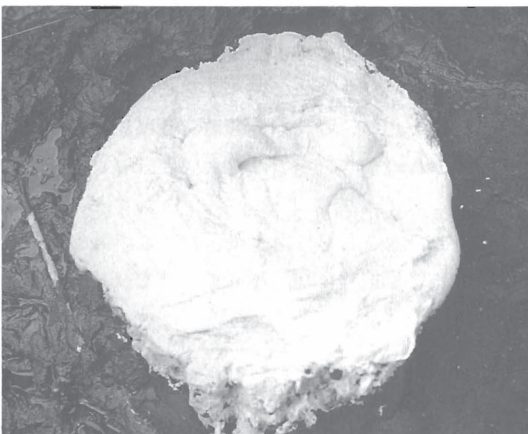


① 検出状況。記録写真，作図を行う。



② 乾燥を防ぎ，発泡ウレタンとの離型材とするため薄い和紙を10cm四方に切り，重ね張りをする。

③ 周囲に巾5cm，深さ10cmの溝を掘る。後で逆さまにする時，中の土が落ちないように，底の方が遺物側に広がるように掘る。



④ 溝から発泡ウレタンを入れ，十分に固ったところで上面にも入れる。

⑤ 他の遺物・遺構に気をつけながら，エンピで廻りを掘り下げる。

⑥ 最後に地面と切り離して，天地を逆さまにし運搬する。

なお，両遺物については，PEG（ポリエチレングリコール）含浸法により保存処理を行う予定である。処理工程，結果については改めて報告することとする。